九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王陽明の「朱子晩年定論」について : 明末清初朱陸論序説

吉田, 公平

https://doi.org/10.15017/18183

出版情報：中国哲学論集. 特別号, pp.41-60, 1981-03-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

王陽明の「朱子晩年定論」について

――明末清初朱陸論序説――

吉田公平

一　はじめに

明末・東林の驍将、顧憲成（一五五〇―一六一二）は、いう。

宏（治）正（徳）以前は、天下の朱子を尊ぶこと、孔子を尊ぶより甚し。究まるや率流して拘となりて、人これを厭へり。是に於てか激して王子となる。正（徳）嘉（靖）以後は、天下の王子を尊ぶこと、孔子を尊ぶより甚し。究まるや率流して狂となりて、人またこれを厭へり。是に於てか転じて朱子を思へり。その激して王子となるや、朱子は詘けらる。その転じて朱子を思ふや、王子は詘けらる。則ち同中の異、異中の同を審かにせずして、各々その見に執して、過りて抑揚をなすに由る。それこれをいかんぞ可ならんや（経皋蔵稿巻十一、日親書院記）

顧憲成の盟友、高忠憲（一五六二―一六二六）も、またいう。

嗚呼、道の明らかならざるや、漢儒の訓詁に支離せり。道の明らかなるや、朱陸の分門に剖裂せり。……。国朝、弘（治）正（徳）以前は、天下の学、一より出ず。嘉靖より以来は、天下の学、二より出ず。一より出ずるは朱子を宗とするなり。二より出ずるは、王文成公の学行なわるればなり。朱子の説、大学は多むね二程に本づく。（王）

文成の学の力を得る所は、蓋し深く（陸）子静に契へり。繇りて以て二たる所なり（高子遺書巻九、王文成公年譜序）

王陽明の良知心学が出現して後、思想界が一変したことは、ここで贅言するまでもない。それは明末から清初にかけての思想家にとってはいわば共通の思想史観であった。顧・高の右の発言は共に朱子学者の目からみた表白であるが、この両者の言表からもうかがわれるように、朱子学と陸・王学との対抗関係で思想史が把握されていることにあらかじめ留意しておきたい。

ともあれ、思想界がかく一変した事態をいかに評価するかは、思想家各人が抱懐する思想の内実に促された、良知心学に対する評価と深く関わって、各人各様であるが、今、ここで敢てそれを分類するなら、

良知心学の出現を歴史的必然とみて、新運を打開したものと評価し、それの提起した問題を積極的に各自がひきうけていこうとした人々、

良知心学は正学斯道を離反した異端邪道ときめつけて排斥した人々、

とに二大別できよう。もちろん、この両様の中間には、良知心学を好意的に迎えながらもその軌道修正を企画した人々や、良知心学を究極的には否定するものの、その提起した問題は真贄にうけとめようとした人々、更に順逆いずれにせよ、良知心学との邂逅を契機により根源に遡及して第三の道を模索した人々など、個別的にみれば百花斉放の態様を呈しているものの、両極を大局的にみれば、先の如く二大別して大過あるまい。その証言は枚挙に暇がないが、前者の例として一人あげれば黄宗羲（一六一〇―一六七七）の次の発言、

有明の儒者、その矩矱を失わざる者、亦た多くこれ有り。而れども作聖の功、（陳白沙）先生に至りて始めて明らかなり。（王）文成に至りて始めて大なり（明儒学案巻五、白沙学案）

後者の例として、清初朱子学の総帥、陸隴其（一六三〇―一六九二）の次の発言、

その陽に尊んで陰にこれ（程朱）を簒する者に至っては、則ち固に得て尽く絶たず。蓋し、その弊は、宋元の際に

在りても即ちこれ有り。而れども明の中葉より甚しきはなし。陽明の王氏、良知の説を倡為し、禅の実を以て儒の名に詫してよりす（学術辨、上）

をあげればもはや充分であろう。因みにこの陸隴其は「明の天下は寇盗に亡びず、朋党に亡びずして、学術に亡ぶ」（同）とまでいいきって良知心学を非難攻撃した陽明学排斥の急先峯であった。陸隴其に限らず、明末清初の朱子学者の明代思想史観を、誤解を惧れずに敢て図式化すれば、曹月川・薛敬軒・呉康斎・胡敬斎・羅整菴・呂涇野などを、孔孟・朱子学＝正学路線とみて高く評価する一方で、陳白沙・王陽明路線を、告子・禅学・陸象山学＝異端とみて激しく非難する。陸隴其は、

宏（治）正（徳）以前は、則ち朱（子学）勝り、隆（慶）万（暦）以後は、則ち陸（象山学）勝り、嘉（靖）隆（慶）の間は、朱・陸争ひて勝負半ばせり（三魚堂日記、上）

とものべて、朱陸の勝負で明代思想史を総括し、朱子学が優位であった明代前期を高く評価し、薛敬軒・胡敬斎などを醇乎たる朱子学者としてとりわけ顕彰し、後期の朱子学者の中では陽明学を強くたたいた陳清瀾などを称揚している。そして、陸王路線が隆盛をみた隆慶万暦以降を第二期暗黒時代とみて（第一期暗黒時代は孟子以後―周程以前）、勢い、自らを朱子を直接継承するものと位置づけ、孟子が楊墨・告子をたたいた如く、朱子が陸象山をたたいた如く、王陽明の良知心学を異端として排斥することを焦眉の急とした。この点は、陽明学に好意的な、例えば孫夏峯（一五八四―一六七五）が、王陽明を朱熹の学統を継承するものと位置づけ（理学宗伝序）、また黄宗羲が、朱・陸・王陽明・劉念台の学統を継承するものと自らを位置づけたのとは（孟子師説巻七）、鮮やかな対比を示す。

ところで、顧炎武（一六一三―一六八二）は中国思想史を次の如く総括する。

夫れ道術の分るるや久し。西晋より以来、吾が道の外に別に二氏たり。南宋より以来、吾が道の中に自ら両岐を分つ。又その後、則ち釈氏の精蘊を取りて陰かに吾が道の内に附す（陳白沙・王陽明の如きなり）。又その後、則ち

釈氏の名法を尊んで顕かに吾が道の外に出ず（李贄の徒の如きなり）（日知録巻二十、科場禁約）

ここで顧炎武が、南宋以後に儒教が二分岐したというのは、明らかに朱・陸の分門をいう。また、陳・王と李とは陰顕の差異はあるものの、それを陸学の系譜ととらえている（日知録巻二十、朱子晩年定論、参照）。

南宋の人陳善は「儒釈の二教は殆と迭ひに盛衰を為すを知る」（捫蝨新話上集巻三）と儒仏の隆替を以て思想史をとらえていた。しかるに朱子以前は儒仏論、朱子以後は朱陸論が論争綱目であったと端的に指摘したのは、陳清瀾の次の発言である。

朱子の未だ出でざる以前は、天下の学者、儒仏の異同の辨有り。朱子既に没するの後は、又、転じて朱陸の異同の辨と為る。此れ聖学の顕晦の由りて出ずる所にして、世道の升降の大機なり（学部通辨、提綱）

思想界の推移を如実に物語る言表であるが、南宋以後の思想史を朱陸の争いとみるのは陳清瀾の独論ではない。それは朱陸以後の儒学徒の通論でもあった。その例をいくつかあげれば、王門の言表はひとまずおくとしても、王陽明と同時代の王順渠（一四八七―一五四七）は、

朱陸の辨は、乃ち数百年の未了の一公案なり（順渠文録巻九、看林学正講餘答問復書）

といい、呂坤（一五三六―一六一八）もまた

近日の学問は、陸に帰せざれば則朱に帰し、陸を攻めざれば則ち朱を攻む（去偽斎集巻五、答姜養沖）

といい、孫夏峯もまた

朱陸の同異、聚訟すること五百年（孫夏峯集巻九、陸文安）

という。王陽明以後の思想界の推移に限れば、張楊園（一六一一―一六七四）の次の発言の如くになる。

紫陽・陽明の学の如き、百有餘載以来、学者の論、紛ふこと聚訟の如きは、水火冰炭の相得ざるに幾し（楊園全集巻六、与張白方㈠）

張楊園とて実は陸王をひとからげにとらえていることは明白である（同巻四一、備忘三参照）。清人、鄭子僑もまた

道学の聚訟は、ただ朱陸の異同を始めとなす。五百年来、学者伝えて口実となさざるはなし（鵞湖講学会編巻九、朱陸同異論）

という。つまり、朱熹・陸象山以後の儒学思想史は、朱陸論が軸となって論争が展開されたのである。少なくとも儒学徒達にはそう意識されていた。

朱子学・陸学の両者をどう理解しいかに評価するか。この決判が各思想家の思想構成の重要な要素であったし、また他者批判の視点でもあった。朱陸論そのものは既に朱陸在世時からあり、元・明初期にも論議されたが、それは王陽明の出現により画期され、この後より清初に亘る時期こそ激しかった。

今、その全体を叙述する余裕がないので、ここでは、とりあえず、明末清初期の朱陸論の起爆剤の一つであった王陽明の「朱子晩年定論」に焦点をあてて、検討しておきたい。

二　道一編と朱子晩年定論

朱子学者は良知心学を激しく論難した。しかし、そもそも基本的認識と思考方法を異にする両者間の論争は、ともすればすれちがいに終りがちであった。特に朱子学者の論難は、良知心学の本領を理解しきれぬままに、高飛車な一方的批判に終始する嫌いがあり、論争は平行線をたどることを余儀なくされている場合が多い。

しかしながら、その中でも、論争の素材が客観的なものの場合には、まだしも交通可能であったし、思わぬ副産物を生んでいる。

王陽明が自説主張の論拠として提供した客観的素材は「大学古本」と「朱子晩年定論」である。王陽明が「礼記」

所収の「大学」そのままを「大学古本」として提供したことは、朱熹の「大学章句」の恣意性を白日の下にさらし、原本「大学」をめぐる論議を誘発し、ひいては豊坊の「石経大学」を導き出し、明末清初思想界における「大学」をめぐる喧しい論議をまきおこす契機となった。王陽明が反朱子学の自説を主張するに当り、「大学古本」に着目したことは秀れた視点であり、それは強力な援軍であったし、朱子学突き崩しに充分にその役割を果したといってよい。

ところが、もう一つの「朱子晩年定論」は「大学古本」の如くに援軍とばかりにはならずに、むしろ、王陽明その人とその思想の欺瞞性を暴露することにはやる朱子学者に、格好の標的を提供した観さえある。

王陽明は、程敏政（一四四五生）の「道一編」六巻（程敏政の自序は一四八九年、李汎の後序は一四九〇年。因みに王陽明の十七・八歳の時）に示唆をうけて、新たに「朱子晩年定論」を編集したという（全書巻四、与安之書）。つまり、王陽明は四十三・四歳（一五一四・五年）の頃、南京在住時代に、「朱子晩年定論」を編集し、それを四十七歳（一五一八年七月）の時に「大学古本」と同月に刊行した。翌八月には薛侃編「伝習録」を刊行している。この年は王陽明が自説を編著の形で公開した記念すべき年である。「朱子晩年定論」の編集は「道一編」の刊行に後ること二十五年、その刊行は二十八年後のことであった。

王陽明以前の朱陸論は、朱子学一尊と朱陸調和論の争いである。この調和論の総決算が程敏政の「道一編」である。[1]「道一編」以前の朱陸調和論は、両者の思想、特に尊徳性・道問学の工夫実践論を漠然と両可折中した調和論であった。それに比べて、程敏政の「道一編」のきわだった特色は、朱陸の両者が、早年＝相異（巻三）中年＝疑信相半（巻四）晩年＝同一（巻五）であったという結論の下に、両者の書簡を編集して、いわば、両者、とりわけ朱熹の思想が、順次発展成熟したととらえ、あまつさえ、朱熹の定論は晩年にこそあり、それは陸象山と同一であったと主張した所にこそある。この点は、程敏政の創見である。（なお、巻一は朱陸往復書簡集、巻二は朱陸の応酬の詩、[2]巻六は宋元の朱陸調和論の総集である）。

この「道一端」に示された、朱子晩年定論の構想を借用して、朱熹の書簡だけ、それも王陽明が晩年のものと考えた三十四通を編集し、最後に呉草廬の「尊徳性道問学斎記」を附録したのが、王陽明の「朱子晩年定論」である。

ところが、こともあろうに、「道一編」「朱子晩年定論」いずれも収録する書簡の執筆年次を考証しないままに編集された。そのために、後に両書は共に朱子学者から、歴史事実を歪曲した杜撰なものと、てきびしく非難されることになる。「道一編」はたしかに「朱子晩年定論」とこみで徹底的に反論された。しかし、両者に対する朱子学者の攻撃姿勢には自ら軽重がある。程敏政は「道一編」で朱陸調和論を展開しながらも、そこにとどまって、両学を超克した独自の思想体系を準備しなかった。だから朱子学者の程敏政批判はその朱子学理解の誤謬を糾弾すればそれで充分である。それに対して、朱子学に昂然と反旗を翻し、陸象山を顕彰した王陽明は、単に左朱右陸に局蹐したのではない。それは、独自の心学体系を樹立した上での、時流に対する一つの態度表明でしかなかった。朱子学者にとっては、一世を風靡した良知心学こそがそれこそ問題であったのである。しかし、やっきになって良知心学批判を展開する際、その張本人である王陽明の人と学問のうち自信に満ちて、格好の標的にしたのが、他ならぬ「朱子晩年定論」であった。だから、「道一編」は「朱子晩年定論」とこみで論難されたとはいえ、それは「朱子晩年定論」批判の随伴現象であった。いいかえれば、「道一編」は、それに刺戟された、他でもない王陽明の「朱子晩年定論」が出現したからこそ、俎上にあげられたのである。

それでは、あらためて、「道一編」に対して「朱子晩年定論」の独自性は何か、といえば、まず第一に、陸象山との調和並列論という形をとらずに、朱熹一人の晩年定論を編集したこと。第二に、朱熹の晩年定論の書簡を選択するに当って、「道一編」巻三（早年）の一通、巻四（中年）の一通、巻五（晩年）の八通、すべて十通の書簡と同じものを採択するものの、更に新たに「朱子文集」より二十四通を採録したこと。第三に、呉草廬の一文を巻末に附録したこと。以上の三点が形式上の独自性と、とりあえずはいえよう。

そこで、右の三点をあらためて検討したい。第三点。呉草廬の「尊徳性道問学斎記」については、既に「道一編」巻四に指摘があり、また、程敏政の別著「心経附註」（程敏政の自序・後序、汪祚の後序は一四九二年）巻四にこの一文を約半分に節略して収録している。王陽明は呉草廬のこの一文を附録するに当ってもっともらしい前書きを認めているが、その節略の仕方は程敏政と全く同じであり、最後に附録する形式も「道一編」を踏襲したものである。強いて独自性をあげれば、「道一編」巻六に附録された、程敏政以前の朱陸調和論、虞道園、鄭貞白、鄭師山、趙東山の文をすてて、「心経附註」所載の呉草廬の一文の節略をそっくりそのままここに附録したことである。王陽明の前書はこの採択の意図を表白したものである。

第二点。程敏政は、朱熹の晩年の定論＝朱陸晩同の書簡として十五通を「道一編」巻五に収めた。王陽明はそこから八通を採択した。そのうち四通の採択の仕方は「道一編」に同じ。他の四通はその節略の仕方に多少の出入がある。採択されなかった七通は、程敏政が「晩同」の証拠にあげはしたものの、しかし、そこには朱熹の悔悟の表白がないが故に不採択になったのである（朱子晩年定論序、参照）。逆に「道一編」が早年・中年と措定した巻三、巻四所収の各一通を採択したのは、そこに悔悟の表白をみてとったからである。新たに採択した二十四通もその採択基準は悔悟の表白である。つまり、「朱子晩年定論」は、「道一編」の朱陸早異晩同論から、朱子晩年悔悟＝定論に採択基準を転換したのである。この視角の転換が「朱子晩年定論」の基本的特色である（第一点の独自性に関わるので、後にのべる）いいかえるならば「朱子晩年定論」の編集方針は、朱熹の悔悟の表白を採択基準にしたのであって、書簡の執筆年次の考証をふまえた確かな論拠のもとに「晩年」を決定したのではない。このことは、「道一編」が早年、中年と措定した書簡を採択している一事からも明白なのであって、「朱子晩年定論」を考える場合にはとりわけ留意する必要がある。王陽明の本書編集の意図はそこにはなかった。（年次考証の点は「道一編」も同様である。）採択基準の転換とて王陽明の全くの独創ではない。程敏政の、早年未定論―晩年定論（自序）に示唆をうけたものであり、採択作

業もまた「道一編」に負う所すくなくなかった。また『朱子語類』をとらなかったのは、その信憑性を疑ったからであるが、この点も程敏政を踏襲するものである。

晩年とはすぐれて時間的概念であり、晩年悔悟とは全面的自己批判を意味する。このことを主張するために公刊した「朱子晩年定論」を編集する過程で、採録書簡の年次考証を手抜きしたことは、事が事だけに、いかにも安易な編集であった。仮りに、決定的な年次考証の上で、晩年悔悟＝定論を提示できていたなら、朱子学に対して致命的な打撃を与えていたにちがいない。そうでは全くなかったが故に、朱子学者に反撃する余地を与え、「朱子晩年定論」が逆縁となって、朱子学者の朱熹研究を誘発し、幾多の副産物を生むことになる。

第一点。それでは、王陽明が「朱子晩年定論」を編集した意図は何であったのか。

王陽明は「朱子晩年定論」を編集刊行したのは、朱子学者の批判をかわす方便であったかの如くのべているが（全書巻四、与安之）しかし、この述懐を額面通りに受けとるのは早計であろう。「朱子晩年定論序」において王陽明は次の如くいう。

世の伝ふる所の集註・或問の類は、乃ち其の中年未定の論なり。自ら咎めて以て旧本の誤りと為し、改正せんと思ひて、未だ及ばざるなり（全書巻三、及び巻七）

程敏政が〈朱熹早年未定論―晩年定論〉と措定した構想をうけつつも、王陽明は未定論を中年にまで引きあげて、朱熹の思想の精髄である「集註」「或問」の類を全て中年未定の論であると断言して、当時の思想界において圧倒的に受容されていた〝朱子学〟を異端であるときめつけ、そして、朱熹は晩年に旧学を全面的に自己批判し、その改正を意図したが、果しえぬままに死去したのだという（朱子晩年定論序、伝習録上巻一〇〇条参照）。この立論は誠に巧妙である。なぜなら、朱熹は未定の論を改正しようと意図したが、遂にできなかった、というからには、今日残されている朱熹の著述言表は全て未定の論ということになり、朱熹の定論の内容がいかなるものであるかを検討することは、

今日もはや皆目不可能ということになるのだから。とどのつまり、今日知りうる朱熹の定論は、晩年に自己批判したこと、及びその自己批判の方向性だけということになる。王陽明の「朱子晩年定論」とはまさしくこのことを立証しようとしたものである。だからこそ「朱子晩年定論」においては悔悟を表白した自筆の書簡のみを編集したのである。その際、悔悟を表白している書簡が他事に言及している場合には、その部分を強引に削除して、悔悟の部分のみを節録している。王陽明は次の如く公言する。

予、既に自らその説の朱子に繆らざるを幸とす。又、朱子の、先に我が心の同じく然るを得るを喜び、且つ、かの世の学者、徒らに朱子中年未定の説を守り、復たその晩年既に悟るの論を求むるを知らず。競ひて相呶呶し、以て正学を乱して、自らはその已に異端に入るを知らざるを嘅く（朱子晩年定論序）

これは、もはや単なる方便でもなく、ましてや朱子学に対するいささかの妥協でもない。昂然と反旗を翻した挑戦状である。ここで、王陽明が寧王震濠の乱を平定し、良知説を創唱した後、世の囂々たる非難をあびる中で、その理由をのべた際に、回想した次の発言

私は南京に在住するまでは、なお、いくぶん郷愿の気持があった（伝習録巻下一一二条）

をあらためて想起したい。「朱子晩年定論」はこの南京在住時代に編集された、朱子学に対する訣別宣言であった。「道一編」の朱陸晩同論をすてて、朱熹一人の晩年定論を編集した理由についてはもはや多言を要すまい。陸象山心学にたとえ「粗」なる部分があろうとも、基本的にそれと決定的な訣別をしなければならないいわれはなかったのである。

三　晦翁学験と閑闢録

「朱子晩年定論」の反響についてのべる前に、次の二つの著書について触れておきたい。

一つは、林光の「晦翁学験」についてである。林光、字は緝熙、号は南川・南翁。広東の人。一四三九―一五一九。陳白沙の門人。別集に「南川冰蘗集」十四巻八冊がある。（広東中山図書館蔵。広東文献書目知見録、参照）。白沙門下第一の高弟と、白沙一門の師弟がこぞって称讃した林光の人物と思想については興味尽きないものがある。「晦翁学験」については、屈大均著「広東新語」巻十一、晦翁学験。「広東文徴」巻七、林光。「広東文徴作者考」巻二　林光。容肇祖著「明代思想史」第三章、陸学的復活与陳獻章学派、三、林光。が言及するが、「晦翁学験」そのものは、もはや失なわれた。幸いに「晦翁学験序」が「南川冰蘗集」巻二。「広東文徴」巻七。に収めるので、これによって、その主旨はうかがいうる。（「広東新語」巻十一、晦翁学験。はこの「晦翁学験序」の主旨を要約したものである。）それによると、林光は一四九九年に執筆にとりかかり、秋には草稿の完成をみた。しかし、一五〇〇年二月十日に師の陳白沙が死去したためであろうか、一気に定稿を完成させることはできなかった。それは一五〇〇年の夏にようやく成書し、この年の八月二日に「晦翁学験序」を書きあげている。本書の主旨、いいかえれば、林光の朱熹理解の骨子は、

凡そ封事及び朋友の書簡、門弟子の答応の間、皆、先生の手筆なり。而るに自ら悔ゆるの言、猶ほ屢屢これを見る。乃ち知る、先生の学、その悔ゆる所以の者は、乃ちその晩年の体験を進むる所以なるを。蓋し、人知るに及ばずして、独り覚る者有るなり

林光もまた、朱熹は晩年に悔悟したとみて、その晩年悔悟の説を編集して「晦翁学験」と命名したのである。林光にとってこのような朱熹理解は、師陳白沙の理解評価に深く関わることでもあり、決して消閑事ではなかった（南川冰蘗集巻二、与張廷実主事書。一五〇三年七月二一日執筆）。「晦翁学験」の完成は、「道一編」に後るること十年。「朱子晩年定論」に先立つこと十五年のことである。

新安の人程敏政及びその「道一編」について、林光は一切言及しない。そればかりではない。「晦翁学験」編集の経緯について、林光は「晦翁学験序」の外、何も語らない。師友は「晦翁学験」そのものについてさえ一言ものべない。そのため、今、この序文以上のことは知る由もない。王陽明もまた「道一編」には言及するものの「晦翁学験」には全くふれない。それなら、林光が隠れた思想家であったのかというと、そうではない。羅一峯、荘定山・張元禎など、師陳白沙と交渉のあった俊秀と交流があったばかりではない。王陽明の最初期からの講友の一人湛甘泉（一四六六―一五六〇）が「南川林公墓表」（南川冰蘗集巻之末、国朝獻徴録巻一〇五）「祭林南川先生文」（南川冰蘗集巻之末、甘泉文録巻十九、甘泉文集巻三十）を著して「そ（陳白沙）の門を得て入る者は、ただ南川先生一人のみ」（墓表）とまで同郷同門の大先輩を顕彰したのは、とりもなおさず師陳白沙の顕彰に関わることでもあったから、当然のことといえばいえよう。もう一人の講友、黄宗賢（一四七七―一五五一）もまた林光に親しく教えをうけている（石龍集巻十五、謝林南川書〈一五〇四年執筆、南川冰蘗集巻之末にも収録〉。寄林南川書。参照）。王陽明にごく近いこれらの人々の間でもそれなりに注目されていた思想家であった。白沙門下に林光ありとは、当時の識者のいわば共通認識であった。それにつけても、林光の学徳行状をのべる師友の文が、いずれも「晦翁学験」にふれないのは、それが既に早く失なわれたか、もと刊行されなかったか、或は流布しなかったのか、に起因するのであろうか。いずれにせよ、「晦翁学験」の出現は、王陽明が「朱子晩年定論」を主張する思想環境としては、有利でこそあれ、もし、王陽明が知りえていたなら、それを強いて無視しなければならなかったとはいかにも考えにくい。「朱子晩年定論」出現以後、いやましに朱陸論が喧しく論議され、「道一編」「朱子晩年定論」の両論に対する賛否がとりざたされた中においても、この「晦翁学験」は、勢い、黙殺された。

ともあれ、朱子学をあまりにもきびしすぎる実践論だと断じた陳白沙の門流においても、朱熹その人が晩年に及んで自らの学を悔悟したのだという朱子学理解が生れていたことは注目してよい。思想界はそこまで動いていたのであ

る。若年時に苦い朱子学体認の挫折を経験した王陽明の、朱子晩年悔悟＝定論という朱子学理解の出現が、全く孤絶した現象ではなかったことを、あらためて確めておきたい。

もう一つは、程瞳の「閑闢録」十巻についてである。程瞳には「閑闢録」とは別に「新安学繫録」十六巻（一五〇八年自序）がある。新安の人であった程瞳が、新安は「程子の従りて出ずる所、朱子の闕里」（自序）であるところから、新安出身の程朱の学繫者一一二人の授受・行実を明らかにしたものである。「閑闢録」は「新安学繫録」執筆の七年の後、一五一五年に執筆された。但し、本書がこの年に完成したのか否かは疑わしい。というのは、巻十に一五二三年の記事を含み、自序と十五年のへだたりがあるからである。更に、巻十の按語の冒頭の第一条のみが巻一～巻九と同様に「瞳按」とあるのに、第二条以下は「愚按」とある。一旦は完成をみた後に程瞳が補筆したのか、後人が加筆したのか、傍証もなく、また巻十及び子の程纘洛の「刻閑闢録後（一五六四年執筆）に欠字があり、この疑問は解氷し難い。（欠字は和刻本も同じ）。それにつけても、一五二三年は、「朱子晩年定論」刊行後七年である。本書は元来が「道一編」批判を目的としたとはいえ、一五二三年の記事を含みながら、「朱子晩年定論」にふれないのは、いかにも不自然である。待考。

ともあれ、「閑闢録」は、ひとえに程敏政の「道一編」を真向から批判した朱子学者の反駁書である。程瞳は「道一編」に展開された朱陸早異晩同論を反駁するにあたって、程敏政が採録した朱陸両者の書簡に特に留意しつつ、更に語録をも併せて、その年次を考証して、朱陸両者は徹頭徹尾異なることを明らかにし、「道一編」の立論を根底から覆えそうとした。そして巻末の巻十に十三条の朱陸論をあげて各々に賛否の論評を加えている。

程瞳は、新安の朱子学の学統を顕彰するために「新安学繫録」を執筆した後に、同じく新安の人である程敏政の「道一編」を邪説曲解と排斥したのが、この「閑闢録」であり、これは、「道一編」に対抗した、朱子学者の、最も早い時期の朱子学護教の専書である。

王陽明が「道一編」をうけて「朱子晩年定論」を編集していたのと、全く時を同じくして、程瞳は逆に「道一編」に反駁するために「閑闢録」を編集していた。両者はともに「道一編」に触発されながらも、相互に没交渉のままに、全く別方向の編集作業を営んでいたのである。

「道一編」にしろ「朱子晩年定論」にしろ、編集の意図はともあれ、立論の根拠として不可欠な年次考証を欠落していたことが、致命的な欠陥であった。この時には程瞳がみる由もなかった「朱子晩年定論」はともあれ、王陽明が大巾に依拠した「道一編」の年次考証の不備を批判した書が、時あたかも「朱子晩年定論」と同時に編集されていたのである。ところが、「閑闢録」はすぐには刊行されなかった。後に「道一編」「朱子晩年定論」を朱子学者が自信をこめて批判したのは、まさしく、この「閑闢録」が指摘した年次考証の点である。清初の朱子学者が、朱熹の年譜作成の作業を進める中で、「閑闢録」が顧みられた際に、まま、その考証の甘さが責められることがあるものの（王白田、朱子年譜考異）、「閑闢録」が「道一編」の弱点を鋭く剔抉し、後の「道一編」「朱子晩年定論」に対する朱子学者の批判の基本的方向を既に先取りしていたことは注目してよい。もし、「閑闢録」がすみやかに刊行されていたら、王陽明は、既に編集しえていた「朱子晩年定論」を焼棄するか、或は再編集するか、いずれにせよ、すくなくともそのままでは刊行しなかったにちがいない。また、朱子学者の「道一編」「朱子晩年定論」批判、ひいては「朱子晩年定論」出現以後の朱陸論は、別様の展開を示したであろう。

四　「朱子晩年定論」の反響

「朱子晩年定論」が編集されるや、王陽明門下でひそかに、しかし熱狂的に読まれ、その公刊の実現をみた経緯については、袁慶麟の跋文に詳しい。

しかし、朱熹が晩年に全面的に自己批判したのだ、という提言は、朱子学者にはあまりにも衝戟的であった。とはいえ、朱熹に悔悟の言表があるのもまた事実である。この「朱子晩年定論」に対して、いちはやく反論したのが、羅整菴（一四六六―一五四七）であった。（困知記附録、与王陽明書㈠）。もともと、王陽明は、まずは「悔悟」の言表を摘出して、それを強引に晩年のものとしたのであって、確たる根拠があってそれを晩年の定論としたわけではない。だから、朱熹が何歳の時に晩年定論を確立したのか、ということについて、到底、明言しえなかったし、してもいない。また、朱熹が「悔悟した」という一事にこそ主眼があったから、その必要も認めなかった。朱熹が晩年に悔悟して陸象山に同調したという「道一編」の主張を踏襲して、悔悟の言表をあげて晩年のものとしたのは、それが自説の主張に好都合だったからである。羅整菴は「朱子晩年定論」の弱点を衝いて、

所謂晩年とは断ずるに何年を以て定めたるか（前同）

と詰問する。よしんば、年次考証に意を用いなかった王陽明が措定した、中年未定論―晩年定論が、たとえ具体的年次が不明なままであっても、もし、たまたま年次の顚倒がなかったなら、まだしも弁解の余地があった。ところが、王陽明が中年未定論とした「集註」「或問」と晩年定論とした書簡との年次が逆倒していた。そこを羅整菴は批判する。王陽明はそれに答えて次のようにいう。

その「朱子晩年定論」を為るや、蓋し已む得ずして然り。中間の年歳の早晩は、誠に未だ考えざる所有り。（然れども）必ばしも尽くは晩年に出でずと雖も、固より晩年に出ずる者多し（伝習録中巻、答羅整菴少宰書）

王陽明は年次考証の不備を認めて羅整菴の批判をうけ入れざるを得なかった。その上でなお弁解しているが、羅整菴は年次の早晩を批判したのであって、「朱子晩年定論」所収の書簡が分量的に晩年のものが多いか否かを問題にしたのではない。だから、王陽明のこの弁解は反批判にはなっていない。後世、羅整菴は、朱子学者から、その心性理気論は非難されながらも、こと王陽明批判、とりわけ、いちはやく「朱子晩年定論」の杜撰さを暴露した人として、常

に引きあいに出され、その功績が高く評価されたのは、ひとえに王陽明に非を認めさせたその批判の真当さの故であった。この点では弁解の余地のなかった王陽明は、これに続けて「夫れ道は天下の公道なり、学は天下の公学なり」と名言を吐くのは、いわば、ひらきなおりである。もはや朱熹を借りて自らを語ることをやめて、今後はあからさまに自説を展開することを公言したのである。

それでは、王陽明が羅整菴の非難に屈して「朱子晩年定論」を撤回したかというとそうではない。もともと「晩年」にではなく、「悔悟」にこそ着目したのであり、そして、その悔悟は晩年であってこそ好都合だったにすぎない。立論に不備があり、一部の書簡が中年未定論の時期のものであったにしろ、晩年に悔悟したものが分量的に多い以上、より晩年に悔悟した事実は動かない、とみた。王陽明の先の弁解はこのことをいう。だから、後に朱子学者周道通（一四八五―一五三二）から「朱子晩年定論」を批判された場合には、それを突き離している（伝習録中巻、答人論学書）

羅整菴ほど後に話題にされることはなかったが、魏莊渠（名校、字子才、一四八三―一五四三）もまた、「朱子晩年定論」の年次考証の不備と理解の不当を指摘して、いう。

「朱子晩年定論」をば、近ごろ始めてこれを見る。年の先後、論の異同を計らざるに似たり。ただ、己が意に合すれば、即ちこれを収載するのみ（莊渠遺書巻三、与余子積）

「朱子晩年定論」の核心をついた鋭い批判といえる。羅整菴は「朱子晩年定論」の年次考証の不備を批判するにとどまり、朱熹の思想形成の発展段階についてまでは言及していない。それに対して、魏莊渠は続けて、

文公の、心学を論ずること凡そ三変せり

とまず、朱熹の思想活動を三期に区分して、各期を次のように説明している。

第一期、「存斎記」（朱子文集巻七七、朱熹二九歳の作）に代表される、禅学を学んだ少年期。第二期。李延平にあ

って学禅の非を覚り、張南軒にあって胡五峯の学を知り、その察識端倪説を是認した、「中和旧説（序）」（朱子文集巻七五）に代表される時期。（王陽明が「晩年」と措定した朱熹の答何叔京書〈朱子文集巻四十〉について、羅整菴も「集註」「或問」以前のものとしたが、魏莊渠も第二期のものとする）。第三期、張南軒の影響から離脱して中和旧説の非を覚り、已発未発説を改定した、それ以後の時期。これ以後の思想を「終身の定見」とする。結論として、

夫れ大抵、（朱熹）先生は、その初年より固に已に卓然として聖学に志有り。然ども、未だ、言語文学の為めに工夫を分却するを免れず。中年以後に至り、方めて一定の規模有り。今日、正に当に先生の已定の論に因りて反ってその未定なる者を證すべくんば、持循する所有るに幾し（同前）

という。つまり「朱子中年定論」の提言である。これは、王陽明の、中年未定論―晩年定論に対する決定的な反措定である。羅整菴の批判に比較するなら、独自の三段階発展説を提示して、王陽明の中年未定論―晩年定論を覆した一歩進んだ反論である。

はたして魏莊渠の王陽明批判は相当に論議をまきおこしたようで、王陽明の盟友黄宗賢は、そのありさまを次のようにのべている

近ごろ、京師の朋友の書来りて、（京師では）頗る学術の異同を論じて、乃ち王伯安・魏子才を以て是非を為す。（王）伯安を是とする者は則ち（魏）子才を以て謬りと為し、（魏）子才を是とする者は則ち（王）伯安を以て非と為す、と。（石龍集巻十七、復李遜菴書）

黄宗賢その人は、当時、論議沸騰していた朱陸論については、

区区、朱陸の辯、姑らくこれを置きて可なり。朱（熹）果して此に益有らば、則ちこれを朱（熹）に求め、陸（象山）果して此に益有らば、則ちこれを陸（象山）に求む。要は皆な自らその身を成すのみ（同前）

という。朱陸の既説から自由になった、心学を基調として、両学に対して是是非非の立場をとりながら、魏莊渠が朱

子学の門戸の見に執着しているとみて、陸学をもあらためて検討することの必要を主張し、徒らな朱陸論に走ることを戒しめている（石龍集巻十七、答邵思抑書。復王純甫書㈠。参照）

程敏政の「道一編」も、朱熹の思想を、早・中・晩の三変とみた訳だが、魏荘渠のこの朱熹心学三変説が彼の全くの独創なのか否か、今、詳かにしえない。いずれにせよ、王陽明の「朱子晩年定論」に刺戟された魏荘渠が、朱熹の思想形成を発展的にとらえ、朱熹の定論確立期を、已発未発説改定時と結論したことは、後に清初の朱子学者が精緻な朱子年譜研究の結果えた、今日、定説とされている、四十歳定論確立の結論と、奇しくも符合する。魏荘渠は「朱子文集」「朱子語類」があまりに浩瀚なことを慮って両者を素材に「朱子遺書」を再編集しているが（荘渠遺書巻六、朱子遺書序）、おそらく、このような朱熹研究の中で培かわれた朱熹理解に基づくこの結論を、この時期に既に提出しえたことは、魏荘渠の見識の卓抜さを物語るものであろう（陸隴其、三魚堂日記、巻上、参照）

次に湛甘泉の「朱子晩年定論」に対する反応をみよう。王陽明から「朱子晩年定論」を恵贈された湛甘泉は答えて次のようにいう

楊仕徳至り、並びに諸々の教を領く。忽然と拱璧の入手せるが若し。その慰沃を為すこと量るべけんや。諸々の論説する所は、皆な是れ斬新自得の語なり。「朱子晩年定論」の一編に至っては、尤も独見たり。（朱熹は）ただ、前一截は則ち言語に溺れ、後一截は言語を脱離す。孔子の所謂事を執りては敬の、内外一致せる者に於て、両つながらこれを失なふのみ。奨進を承くるの意、極めて厚し（甘泉文集巻七、答陽明都憲。なお、甘泉文録巻十七所収の答陽明都憲は「尤為独見」を「似為新見」に作る）

さりながら、湛甘泉は陸象山を丸ごと尊崇する世の論調に同意しない。かといって陸象山を禅学ときめつける排陸論にも賛同しない。なぜなら、陸学は禅学ではないにしろ、一伝して楊慈湖の真禅が出現したのは、陸象山にも責任があるのだから。（こう考えた湛甘泉は、後に陸象山と楊慈湖を切り離して、専ら楊慈湖批判を展開したのが「楊子折

衷」である。崔銑の序は一五三九年。甘泉文集巻二十四、参照）

今や、朱陸ともに問題があるからには、世の朱陸是非論を越えて、更に程明道にまで遡及して「中正の学」を志向したのが「遵道録」である。（甘泉文集巻十七、甘泉文録巻五、叙遵道録、参照。因みに遵道とは程明道に遵うこと）。王陽明が一五一八年七月に「朱子晩年定論」を公刊した、そのわずか九ケ月の後の一五一九年三月に湛甘泉がこの「叙遵道録」を執筆しているのをみると、湛甘泉は、王陽明から「朱子晩年定論」を恵贈されてまもなく「遵道録」を著したことになる。更に湛甘泉は、王陽明が中年未定論―晩年定論の基調の下に「朱子晩年定論」を編集したそのひそみに倣って、いかにも湛甘泉らしく、朱熹の「小学」をとりあげて、

夫れ吾の編む所の者は、朱子の意なり。今の伝ふる所の者は、朱子未定の書なり（甘泉文録巻六、古小学序、答問）

と断定して新たに「古小学」を編集している。朱子学と陽明学を左右ににらみあわせながら、独自の路線を歩んだ湛甘泉の本領の一端がうかがえよう。

五　おわりに

南宋～清初に亘って、朱陸論が重要な命題として論議された（少なくとも儒学徒はそう考えた）。この五百年に及ぶ朱陸論を画期し助長したのが、王陽明の「朱子晩年定論」であった。なぜなら、朱熹を問うことは、とりもなおさず陸象山を問うことでもあったから。今、「朱子晩年定論」出現の経緯、その特色、同時代人の反響（但し、本稿で明らかにしえたのは主要なものとはいえ、そのごく一部にすぎない）をみてきたが、実は「朱子晩年定論」論は、むしろ王陽明死後の明末以降においてこそ盛んであった。その大綱を記せば、羅整菴・魏荘渠など朱子学者の正鵠を得た反論が既にあったにもかかわらず、王門派下では「朱子晩年定論」の基調は継承された。更に王門の枠をこえて、朱

熹が晩年に悔悟した、という理解は、通論であったふしさえある。それに対抗して朱子学者の側から実に多くの反論書が編著された。中でも陳清瀾の「学蔀通辨」がその勢いに拍車をかけ、明末清初には学派入れ乱れて、朱陸論、「朱子晩年定論」論が展開された。

本稿がいわば序説にとどまり、その後の動向を具体的に提示しえなかったことは、誠に忸怩たるものを覚えるが、しかし、「朱子晩年定論」出現前後の朱陸論をひとまず明らかにした本稿は、その不可欠な基礎作業の一つであり、この後の朱陸論、「朱子晩年定論」論の解析は、別稿を待ちたい。

注

(1) 「道一編」以前の朱陸論については、岡田武彦氏「朱陸同異源流考」(目加田誠博士還暦記念・中国学論集、所収、其刊行会、一九六四。同氏「王陽明と明末の儒学」、明徳出版社、一九七〇、参照。程敏政の「道一編」については、荒木見悟氏「仏教と陽明学」、第三文明社、レグルス文庫所収。一九七九。が、その特色を簡要に説明している。参照。

(2) 陳清瀾は「道一編」の刊本について、「学蔀通辨」前編巻下で、次のようにいう。

按。閩台者。称道一編。有功於朱陸。為之翻刻。以広伝矣。

按。道一編刻本。今有二。一徽州刻者。程篁墩所著原本也。一福州刻者。王陽明門人所刪節別本也。別本節去辨無極七書不載。豈亦已覚其弊。而為之掩匿耶。

王陽明の門人聶双江の、聶双江集巻三、重刻道一編序、は次のようにいう。

篁墩先生。当天下群咻聚訟之時。乃独能参攷二家之学。曲為折衷。著有此編。非惟有功於象山。其有功於考亭不浅矣。是編也寂焉弗伝。刻板亦不知其何在。予巡八閩。暇用校正重刻之。俟君子考焉。前節去無極七書者。蓋以皆二公早年気盛之語。其於尊徳性之学。亦不甚切云。

これによれば、陳清瀾が別本というは聶双江刻本であることが明らかである。